

大隅和雄

中世歴史と文学のあいだ

吉川弘文館

大隅和雄

中世歴史と文学のあいだ

吉川弘文館

著者略歴

一九三二年 福岡県生まれ

一九五五年 東京大学文学部国史学科卒業

現在 東京女子大学文学部教授・文学修士

現住所

〒117 東京都練馬区石神井台一―二六―一〇

主要著書

『中世思想史への構想』（一九八四年・名著刊行会）

『愚管抄を読む』（一九八六年・平凡社）

『日本史のエクリチュール』（一九八七年・弘文堂）

『事典の語る日本の歴史』（一九八八年・そしえて）

中世 歴史と文学のあいだ

平成五年二月十日 第一刷発行

著者 おおすみ かずお
大隅和雄

発行者 吉川圭三

発行所

株式会社 吉川弘文館

東京都文京区本郷七丁目二番八号

郵便番号 一一三

電話〇三―三八―三―九一五一（代表）

振替口座東京〇―二四四

装幀 三谷頼彦

印刷 理想社 製本 ナショナル製本

©Kazuo Ōsumi 1993. Printed in Japan

ISBN4-642-07392-2

図 日本複写権センター委託出版物

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3269-5784）にご連絡ください。

目次

歴史叙述と文学 — 序にかえて — 1

□

I 末法の宗教と文学 23

一 隠者と遁世 24

二 西行 — 宗教と文学 — 36

三 親鸞とその時代 51

四 親鸞と『歎異抄』 65

II 『平家物語』とその背景 75

一 東国への視点 76

二 『平家物語』と思想史 85

三 『平家物語』とその時代 98

四 『平家物語』と説話集 109

Ⅲ 説話集と思想 123

一 無住と『沙石集』 124

二 無住の思想と文体——中世説話文学ノート—— 131

三 無住『雑談集』をめぐる 150

四 無住の伝記に関するノート 168

Ⅳ 内乱期の思想と文化 177

一 北畠親房と『神皇正統記』 178

二 『神皇正統記』と『増鏡』 191

三 『太平記』と往来物 198

四 思想史からみた『太平記』 212

Ⅴ 中世文化の諸相 217

一 中世の思想 218

二	中世の仏教と神々	231
三	醍醐寺の縁起と説話	242
四	兼好と神道	255
五	歴史資料としての紀行文学	267
六	紀行文と中世の文化	276
	本書にふれた中世の主要歴史書・文学書作品略解説	282
	あとがき	289

写真提供

神奈川県立金沢文庫

宮内庁書陵部

西大寺

笹山晴生

醍醐寺

中央大学図書館

長母寺

東京国立博物館

遊行寺

龍谷大学図書館

歴史叙述と文学——序にかえて——

文学の対象としての世の中

吉川幸次郎によれば、何世紀にもわたって日本の伝統的な文学は、男と女のあいだにあらわれる心の揺れ動き、つまり恋を主題としてきたが、中国の詩文は、志を述べることを目的とし、政治的なものを主題とするのが伝統であったという。たしかに、中国における詩文の伝統を思い合わせると、日本文学の歴史は、恋や四季の風物を詠ずることを主流として成り立っていることを認めざるを得ないであろう。詩文だけのことでなく、中国では通俗的な小説でも、政治的なものへの関心を示しつつづけているといわねばならない。

しかし、われわれとしては、そういう指摘を受け入れるだけでことを済ませるわけには行かないのではあるまいか。日本の文学は何故に、国家や社会の問題を題材にして公的な志を述べるものとしては展開せず、男女や親子のあいだを主題としつつけ、私的な心情を伝えることを中心としてきたのであろうか。それは、日本文学の基本にかかわる大

な問題で、この小論が課せられていることの範囲をこえているが、歴史と文学について考えるためには、そうした問題を避けて通ることはできないように思われる。

日本文学の古典のなかに、国家や社会に関することがらを主題としたものが、なかったのかというとそうではない。権力者の栄華と頽唐を叙述し、世の中の推移を見定めようとした歴史物語や、政治的なものもの集約としての合戦を主題として、その顛末を記述した軍記物語、世間の噂や裏話の数々を収めた説話集などは、国家や社会にかかわる問題を縦横にとりあげて、何世紀ものあいだ多くの人々に読まれてきた。また、政治的、宗教的なさまざまな集団の秩序や倫理を論述した古典も少なくない。にもかかわらず、日本人のあいだでそうした古典を、国家や社会の問題をとりあげた文学として読み、文学史のなかに位置づける試みが積極的にすすめられてこなかったのは確かで、それは日本文学の生い立ちと、伝統的な文学観の影響によるものと考えられる。

歴史と文学との関係を問われた人々は、多くの場合まず歴史と文学との違いはどこにあるかと考えるであろう。歴史は事実を記録し、文学はときには虚構を用いて人間の真実を描くものであるというように。しかし、『栄花物語』や『大鏡』、『平家物語』や『太平記』は、文学として読まれると同時に、優れた歴史叙述として繙くこともできる古典であるし、『今昔物語集』や『古今著聞集』をはじめとする多くの説話集も、半世紀前までは

文学の古典としては顧みられず、史書的一种として読まれていた。

歴史と文学との関係について、知的活動の諸分野が細分化した近代の状況で考えれば、両者の関係をめぐって論ずべき点は明確にすることができるかも知れない。しかし、古代や中世という時代で考えるとすれば、ことはそう簡単ではない。『大鏡』や『平家物語』などの書き手自身が、その記述にあたって文学と歴史を截然と区別していたわけではなく、事実を記録したものが歴史であるといっても、事実というものをどの位相で考えるかについては、さまざまな問題があることは改めていうを要しないであろう。

そこで、ここでは観点を少しずらして、広く文章を綴る営みを考えてみると、文筆活動の諸々の分野のなかに、対人関係の織りなす綾を中心^{あや}に、私的で繊細な心情を述べた狭義の文学作品と、社会や集団の動きをとらえ、世の中のうつり変わりを叙述しようとした古典とがあり、その両者を併せて広義の文学を考えることもできるのではないだろうか。日本の文学史のなかで、世の中のあり方を考え、その推移を叙述しようとした古典の流れは、決して小さくはない。にもかかわらず、世の中というものを見つめ、世のうつり変わりの背後にあるものは何かを問うた古典の流れが、文学史のなかで傍流としてしか遇されなかった理由を説明することは、さまざまな問題が錯綜^{さくそう}していて容易ではない。

最初にまとめられた日本の歴史は、律令^{りつりょう}国家を支える貴族たちが、『史記^{しき}』にはじまる

正史の伝統をもつ中国を強く意識しながら、日本も国家の歴史をもっていることを示そうとして編纂へんさんしたものであった。国家の事業として編纂された国史は、中国の正史を模範としながら、漢文による日録の形式を基本として記述された。漢文と日録という二つの点から考えて、『日本書紀』にほんしよきにはじまる六国史りっこくしは、文学的な性格をもつことの困難な歴史書であった。国史の編述者たちは、日録の短い文章のなかに中国の詩文や史書と響きあう文言もんごんを鏤ちりばめようとして、技巧を競うこともあったが、断片的な記事を集積する国史の形式が、律令国家の政務を遂行するためにはきわめて有用であったとしても、歴史の流れを記述したり、史実に対する批判を縦横に述べたり、歴史についての省察せいさつを読者にうながしたりすることに適したものでなかったのはいうまでもない。そしてその国史が、正統的な歴史として大きな権威をもちつづけたために、歴史は文学と無縁のものと考える伝統が成立してしまったとはいえないであろうか。

そうした伝統のもとで、歴史を論ずる人々のあいだでは、和文で書かれた物語の形式によるなどの歴史は、正統な歴史としては認められず、他方、文学を尊重する人々のあいだでも、和文の歴史は、国家の正統な歴史から外れたものとみるのが一般になった。そして、そのことをことさらに強調することによって、和文の歴史の文学性を云々することが通例になったのである。こうしたなかで、和文で歴史を叙述した古典は、無理に狭義の文

学にひきつけて読まれ、歴史を書いたものとしての本来の性格から離れ、瑣末さまつの表現や小さな虚構に関心を持たれてきたものと思われる。

そこで、ここでは、日本人のあいだでつづけられた文筆活動のなかに、国家のあり方や政治の方向を論じ、世の中のうつり変わりを述べようとした流れと、私的な対人関係を中心に、繊細な心情を表現しようとしたものがあつたとみることとし、和文で書かれた歴史を、世間というものを描き出し、世の中のうつり行きを論じた文学と考えることにし、古代・中世における歴史と文学のかかわりを概観してみたい。

世の中の凝視と記述

紫式部むらさきしきぶが、それと対置することによって物語の本質を明かそうとした「日本紀にほんぎ」、つまり六国史は、日録の形式で記述された歴史であるが、天皇の一代ごとにまとまりをつけることによって、中国の正史の形式である紀伝体の本紀と、編年形式の日録とを折衷し、主要人物の死亡記事につづけてその伝記を挿入し、日録のなかに列伝的なものを取りこむなど、種々の工夫を重ねて史書としての形式を整えたものであつた。しかし、よほどの慧眼けいがんをそなえ、忍耐力をもった読者でも、国史を通読して、そこから歴史の大きな流れを読みとることは難しかったに違いない。国史の記事は世上の広汎な問題にわたっていたが、そ

れをただちに歴史叙述として読める人は、多くはなかったであろう。

国史に集積された知識情報は、律令国家の秩序を維持し、国家の機構を滞りなく動かして行くために必要なものが選ばれていたわけであるが、もともと律令制度というものが外来のものであったから、国史の文章は中国の經書けいしょや史書ししょの文章を模範にして書かれ、詩文の文言を鑲めて作られることがめずらしくなかった。ところが、律令制度の輸入がはじまって二世紀余りの年月が過ぎ、外来の制度文物と土着の生活慣習とのあいだに、覆い難い隙間があることが強く意識されるようになる、国史が営々として記録していたものが、現実の世の中をよくとらえたものとはいえないものであることが知られるようになった。

世の中を見つめてそのあり方を問い、世の中の動きを記述することは漢詩文の世界ではさかんであった。『本朝文粹』ほんしやうもんすい『菅家文章』かんけがふんぢやうなどには、そうした内容の詩文が多数収められているし、文人貴族たちが書いた世間の見聞記ともいべき文章も少なくない。しかし、日本人によって書かれた漢詩文は、その作者たちが政治を論じ世相を批判しても、それがあるののままの世の中を記述することにはつながらなかった。漢詩文は、対象を見つめてそれを写し出すことよりも、作者の観念的な主張を表現することに重きをおく傾向が強く、世相を描出する場合でも知的な遊びといった性格をもち、文章を整えるための技巧に走ることが少なくなかった。したがって、漢詩文の世界を拡大して行けば、日本の歴史を叙述

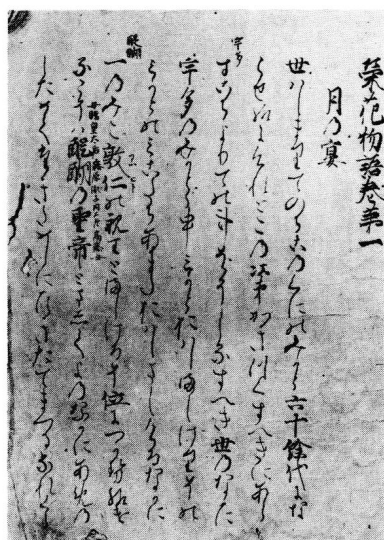
できるかという、ことはそう簡単には運ばなかった。整った漢詩文のことばと文章ではとらえきれないものが、日本の世の中にはさまざまにあり、それを和文で書くことができるようになるには、まだしばらくの時代が必要であった。

国史が記録したような国家の政務に関する情報とは別に、日本人のあいだには氏の神の祭りや、農耕をはじめとする生産のための神事のなかで、神々と人間とのかかわりを語り、人々の生活の規範を確かめることが行われていた。神々を祭るさまざまな場で語られていた伝承は、文字に書かれることなしに伝えられていたが、漢字の普及とかな文字の発達のなかでそうした伝承を記述することが、『日本書紀』とならぶ『古事記』や『風土記』の編纂ではじまり、国史とは別の種類の歴史の記述が試みられるようになった。

ようやく平安時代の半ばになって、かな文字を駆使した表現が可能になったとき、まず記述の対象になったのは、漢字の文章が公的なものを対象にしていたのに対して、私的な性格のものであった。したがって、かな文字の文章は、個人の心象の表現をめざすことになり、世間のことを記述する場合でも、そのありのままの姿をとらえることを目的にしたものではなかった。和歌とすることばがき、読者の興味をそそる伝奇物語にはじまるかな文字の文学が、人間のあり方を見つめて、心の内面を描き出す物語や日記を生み出すまでには、文学史の複雑な過程があったわけである。

榮花物語巻第一

月の宴



1 『榮花物語』の写本（巻一）

物語の手法を借りて、世の中のうつり変わりを叙述しようとした『榮花物語』と『大鏡』があらわれたのである。

歴史の物語がとらえようとした世の中は、書き手と読者の面から考えて、貴族たちが形作っている世の中であった。しかし、一口に貴族社会といっても、それは単純な性格のものではなく、『榮花物語』や『大鏡』が描き出した世の中というものは、貴族社会の中核の部分であり、具体的にいえば貴族社会の中心に立つ貴族たちの動きであった。世の中というのは譬えていえば、貴族社会の中心にあって、脚光を浴びているいわば檯舞台（ひのき）のような

個人の心象を表現することに重きをおいたかな文字の文学は、世の中のことを描いても、作者の心象世界の点景としてとりあげるにとどまっていたが、平安時代の後期にはいつてから、世の中そのものを見つめ、世間のことをありのままに書くことにも向かうようになった。

な部分のことをいい、歴史物語の作者は、その舞台の上に上がっている貴族たちが世の中を動かしているように思い、舞台の上で時めいている人々の動きを語り伝えようとしたのであった。歴史物語が描こうとした世の中は、一人の語り手の物語として収まる狭い世界であり、その狭さの故に世の中をありのままに描くことが可能だったのである。

国史が、朝廷に集まってくる全国の情報を記し、国家の動きを記述しようとしたのに対して、歴史物語が描き出した歴史の世界は、平安時代後期の貴族たちが、自然に思い浮かべた世の中を対象範囲としていた。事実を羅列して行く日録ではなく、記述されたことがらは一段ごとに明確な形象を与えられ、一段一段の物語を積み上げて全編の構想を具体化して行くためには、叙述の対象を限定することが必要であった。貴族社会の歴史に対する関心の範囲と、物語文学の形式とが、他に見られない均衡を保ちえた時代を背景にして、世の中を描く文学が成立したのである。

歴史物語というものは、貴族社会の中心にある舞台を、多くの人々が注目することによって成り立っているわけであるが、平安時代の後期になると、貴族社会の成熟にともなって、舞台の上上がる望みをもてなくなった人々や、いったん上がった舞台の上から下ろされたり、下りてしまったたりした人々が目立つようになった。そういう人々は当然、世の中のできごと、つまり舞台の上で演じられていることに對して、憧れのまなざしを送った

り、関心をもちつづけたりはせず、舞台の下や外にあらわれることに強い関心をもったり、背後で舞台を動かしているものや、舞台の裏で行われていることに興味をもつようになった。

世の中の周縁部や裏にあらわれることを話題にし、そうした一座の語りを文章にまとめることが、文筆活動の対象になると、平安時代の半ばから鎌倉時代の半ばまでのあいだに、数々の説話集が編纂されることになった。文筆の対象として考えられていた世の中が、貴族社会の中心をなしていた舞台の上から、舞台の下へ、外へと拡がって行き、舞台の裏も関心の的になっていったのである。

同じころ、貴族社会の外では武士の活動が目立ちはじめ、各地でおこる武力衝突は、貴族の政治に影響を及ぼすようになった。武士の活動は、説話としても記述されたが、貴族社会に動揺を与えた戦乱については、その顛末を記述することがはじまった。合戦は、それが武力衝突にいたるまでの原因と経過があり、劇的な合戦と戦いが終わったのちに、勝者と敗者のたどる運命というように、広く人々の関心をひく歴史の一齣ひとくまであった。政治的なものが凝縮された合戦の顛末を叙述することは、歴史の記述として重要な分野になるが平安時代の末から鎌倉時代のはじめにかけて、相次いでおこった内乱、保元・平治・治承・承久じようきゅうの乱を対象として、軍記物語と呼ばれる古典の形式が確立し、合戦に集約され